2006 年度

「魂の保護を求める子どもたち」と共に生きる
―人智学から学ぶ―

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
渡邉　知佳

本論文は、障害というものについて、これまでの医学的視点と社会的視点だけでは満たされなかった意味を見出すことによって、障害をもつ子どもたちに対する視点の転換を試みるものである。その方法として、統一された世界観をもつ思想の一つである、人智学に基づいて考察を進めた。日本社会においては、まだまだ「閉じられた」存在である人智学の実証を目的とするのではなく、その思想における障害者観や教育観というものが、障害をもつ人々を取り巻く親や教師、そして社会に、何を与えることができ、そこにどのような課題が残されているのかということを明らかにすることに重点をおいた。

本論文では主に彼の講義録である『治療教育講義』に基づき、それぞれの理論を補うために、彼のその他の著書も参考にした。また、現代のシュタイナー治療教育の関係者たちによる文献や、それぞれの解釈もあわせて参考にした。

はじめに、人智学的な視点から人間の構造をどのように見るのか、そして障害のある子どもたちをどのように観察していき、どのように教育に生かしていくのかという考察をした。そしてさらに、人智学の根底にあるカルマ論というものについての考察をおこない、シュタイナーの述べるカルマ論というものはどのようなものであるか、そしてそのカルマや輪廻転生が障害をもつ子どもたちの教育とどのように関わりがあるのか、ということ、そしてなぜ障害をもって生まれてくるのかということについての見解を明らかにしていった。

これらの考察をふまえ、さらに治療教育の実際を考察するため、キャンプヒル共同体について、そこに生きている三つの根幹を中心にまとめた。そして、輪廻転生やカルマを重要視したシュタイナーの思想に対し、親や教師がどのような思いを持っているのか、それがどのように彼らの人生に影響しているのかを、実際に障害をもつ子どもたちの親へのインタビューを行い、彼らの語りを通して探っていった。

本研究を通して、シュタイナー治療教育の関係者である、障害をもつ子どもの親や家族、教師の方々には、その子どもたちに対する畏敬の念が随所に感じられ、子どもたちは、何も持たない、何もできないといった存在なのではなく、多くのものを担うことができる強い意志をもつ、素晴らしい人格者なのであると捉えており、子どもたちから何かを学ぼうという意識が強いということが明らかになった。このような視点で子どもたちを捉えることができれば、この社会における福祉や教育はより良いものになっていくのではないだろうか。しかし、その実現は容易なことではない。日本社会において、このような子どもたちの捉え方というものが、理解されるためには多くの課題が残されている。それら一つ一つを検証し、より具体的な答えを探求していくことを本研究の今後の課題とした上で、現段階のまとめとしたものが本論文である。